

場面をくらべて読もう

「一つの花」

新しい指導を考える会

■この教材で確かな読みの力を身につけさせるために

「一つの花」（四下）のねらいは、「登場人物や場面の様子を叙述をもとに想像しながら読むこと」である。この教材では、場面と場面を比較したり想像によってつないだりしながら読む学習を展開することが大切である。

これからの読みの指導において、いつそう大事に取り組みたいことは、一人一人の子どもが積極的に言葉とかかわろうとし、内容を正しく読み取ったり表現の美しさを読み味わったりする学びである。このような学びの姿が、自分の考え方や感じ方を駆使して言葉へ働きかけながら読むという「主体的な読み手」と子どもを変容させていくと考える。

そこで指導にあたっては、次の三点に留意する。

一点目は、子どもたちが自分の考え方や感じ方を大切にしながら読み取ることができるようになる。そのために、学びの出発点となる初発の感想を大切に、読み深めていくことができるようにする。

二点目は、個々の読みの視点で読み取る自己学習での教師の支援についてである。自ら言葉とかかわって読み取る学習を進

三点目は、読み深め合う場面について、個の学びを生かしながら学び合うことができるようにする。そのために、読み深め合いの観点を明らかにして、自分と同じ読みの視点での友達との読みの違いや、自分と違う友達との読みについて学び合い、自分の読みを広げたり深めたりすることができるようにする。

■単元の指導計画（総時数10時間）

第一次（第1～2時）

全文を読み、初発の感想を書いて話し合い、学習の見通しをもつ。

①時間の経過を確認し、作品の構成をとらえる。

②互いの初発の感想を比べながら、それぞれの人物像について詳しく学習していくことに気づき、学習の見通しと第4時からの自分の読みの手がかり（読みの視点）をつかむ。

第二次（第3～7時）

登場人物や場面の様子を叙述をもとに読み取る。

①戦争が激しかったころの食べ物、町の様子、ゆみ子の家族について読み取る。

②お父さんとお母さんの会話から、ゆみ子に対するお父さんとお母さんの愛情や願いを読み取る。

③プラットホームの様子を表す言葉とゆみ子の家族との対比や会話文から、一つの花をゆみ子に託すお父さんや、ゆみ子と見送るお母さんの心情を読み取る。

④十年後のゆみ子や場面の様子を表す言葉から、ゆみ子やお母さんの暮らしぶりや心情を読み取る。

めている子どもには、その文章への着眼点のよさや取り組みの様子について具体的に取上げて称揚していく。どのように言葉とかかわっていけばよいのかとまどっている子どもには、場面と場面を比べて読んだり想像してつないで読んだりするために着目すべき言葉や文章を助言する。必要に応じてアドバイスカードを用いたりしていく。アドバイスカードは、初発の感想でとらえた読みの傾向や子どもたちの実態をもとに、子どもが言葉とかかわるためのヒントとなるように扱う。その際の観点は以下のとおりである。

①自力で読み進めることができる子ども	②とまどっている子ども
内容価値（ねらい）と読み取りの技能を一体にしながら読むヒントの提示 ・自分の読みの根拠となる叙述を挙げさせる。 ・いくつかの叙述を取り上げ、関連づけながら自分の読みを積極的にとめさせる。 ・これまでの場面展開の読みと比べたりつなげたりして読ませる。 ・主題について考えさせる。	内容価値（ねらい）へ迫るヒントの提示 ・自分の視点に沿った登場人物の行動や会話文を見つけてさせる。 ・着目する言葉や文章（会話・行動・接続語・段落など）から具体的に何を読み取っていくのか提示させる。 ・言葉や意味の置き換えを考えさせる。 ・そのうえで様子や心情を読み取らせる。

第三次（第8～10時）

「一つの花」の作品世界に対する思いをまとめる。

①これまでの読み取りと場面を比べながら、十年の間に「変わったもの」と「変わらないものであるもの」について話し合い、自分の考えをまとめる。

②題名に込められた意味について話し合い、学習後の感想をまとめる。

■一人一人に確かな「読みの力」を身につけさせる実践事例
留意点 1 初発の感想を生かした読みの手がかりの明確化

第一次の初発の感想は、ほとんどの子どもが次のとおりであった。「ゆみ子↓くいしんぼう、わがまま、悪い子」「お母さん↓自分の分もあげてやさしい」「お父さん↓死んでかわいそう、やさしい」。

この段階での学級全体の実態としては、次の二つのパターンが挙げられる。①自分の読みの視点に沿って叙述に着目して自分の読みをもつことができる。②自分の読みの視点に沿って叙述を見つめることができるが、自分の読みをもつことは難しい。

第二次では、十年前・お父さんの出征の場面・十年後という物語の大まかな構成をとらえ、全文を概観する時間を設けた。そして初発の感想と物語の展開を結び付けながら、一の場面では戦争が激しかったころの様子を読み取る視点とし、二の場面（第4時）以降では、ゆみ子に対するお母さんのやさしさ、お父さんのやさしさを読み取る視点として焦点化した。

①の子どもは自力で場面と場面を比較したり、場面と場面を想像によってつないだりしながら読む学習を進め、②の子どもはアドバイスカードを手がかりに読む学習を進めた。そして、全体で読み深めていく中で、そのやさしさを通して大切な子どもへの並々ならぬ愛情を読み取らせていくようにした。

留意点 2 自己学習における、教師の個に応じた支援

第3時のねらいは、戦争が激しかったころの食べ物や町の様子、ゆみ子の家族の状況について読み取ることである。第4時から自分の読みの視点で子どもが言葉とかかわりながら読み進めることができるよう、その時代背景とその中で生活しなければならぬ一つの家庭の状況について、共通の読みの視点（食べ物・町の様子・ゆみ子の家族）で読み取っていくようにした。

自己学習の場面では、三つの読みの視点についてノートにまとめさせた。その際、書かれてある文章を見つけてラインを引く。その文章から自分の読みをノートにまとめるという手順で行った。また、学びを支えるための支援は、アドバイスカードを用いて、どの子にも自分の読みをノートにまとめられるようにした。

① 叙述から自分の読みをまとめることができる子どもに対する支援

・このころは人々にとって食べ物はどうなものだったのでしょうか。

この段階で、①の子どもは、前表のように多くの人命がなくなっているという時代背景をとらえながら、母親の思いにまで読みができていた。また②の子ども全員が、アドバイスカードを手がかりにしながら三つの観点のそれぞれについて自分の読みを一つずつではあるがノートにまとめることができた。

留意点 3 個の学びを生かした読み深め合い

読み深め合いでは、「食べ物がほとんどないのに、お母さんが自分の分を減らしてもゆみ子に分けたのはなぜか」を話し合いの観点として、母親のゆみ子に対する愛情について話し合った。同時に、戦争のためにたくさん食べさせられない状況とつなげる発問により、ゆみ子に対する母親の願いをとらえさせるようにした。

～読みの振り返りでの子どものノートから～

①の子どもの中から

○ぼくはゆみ子のお母さんはやさしいだけではなくて、すごくゆみ子のことを大切に思っていて、戦争の中でもしっかりと生きてほしいと思っているんだあと分かりました。（Y男）
○わたしは、今日学習してゆみ子はいしんぼうでよくばりだと思っていたけれど、みんなの考えを聞いて「一つだけ」と言うのは、おなかいっぱい食べられなかったということだったんだと気づきました。（N女）

②の子どもの中から

○ぼくは、初めの感想では、ゆみ子はいしんぼうでわがまま

・毎日ばくだんを落とされて、なくなったのはなんでしょう。
・ゆみ子の家族の生活はどのような生活だったでしょう。食べ物や町の様子とつなげて考えてみましょう。

② 叙述を見つけることができるが、自分の読みをまとめられないでいる子どもに対する支援

・食べたいものが食べられた時代だったでしょうか。食べ物について書かれているところから、考えてみましょう。
・毎日ばくだんが落ちていた町はどんな音がしていたでしょう。
・ゆみ子のお母さんはゆみ子が食べ物を欲しがるとたくさんあげることができたでしょうか。お母さんの行動が書かれているところから考えてみましょう。

ゆみ子の家族	町の様子	食べ物	①の子ども	②の子ども
ゆみ子の家も食べ物は足りない。 お母さんはもっと食べさせてあげたいのと思っている。	熱い、真っ赤 建物だけでなく人の命もなくなる。	お米は何より貴重品、食べ物がすごく大切な時代。		ほとんど食べられない、とても足りない。 ばくだんのはげしい音、建物が全部焼かれる。
				お母さんは自分の分をあげている。食べ物はない。

だと書いていたんだけど、今日の学習でゆみ子はそうじゃなくて、いも、まめ、かぼちゃを毎日、しかも少ししか食べていかなかったからもっとほしがっていたことが分かってよかったです。（R男）

○今日、わたしはMさんが言ったことがほんとうだと思いました。少ない中からもゆみ子にあげるのはほんとうに子どもを大切に思っているように感じます。（F女）

①の子どもは、友達の読みから自分の読みを強化しながらねらいに迫ることができていた。②の子どもは、友達の読みによって自分が目を向けた叙述の着眼点のよさに気づいたり、自分が気がつかなかった読みを発見したり納得したりすることができていた。

■評価と課題

今回の実践（第3時）で身につけさせるべき力（登場人物や場面の様子を叙述をもとに想像しながら読む力）については、子どものノート、授業での発言を中心に評価し、おおむねねらいが達成されたと判断した。特に、自己学習で個々の読みを支える手立て（アドバイスカード）を取ったことは、②の子どもたちにとって叙述に即しながら自分の読みをもつことに有効であった。

今後は、自己学習での自分の読みをもつことができるような個の学びを高める支援のあり方、そして個の読みを生かした読み深め合いのあり方と的確な評価を探っていくことが課題として挙げられる。